位置・地勢

うるま市役所

沖縄県うるま市みどり町一丁目1番1号
市庁舎位置／北緯26度22分45秒　東経127度51分27秒

面積／87.01Ｋ㎡
人口／121,601人
　　男性：60,894人
　　女性：60,707人
世帯数／48,507世帯
（2015／2／28）

【うるま市へのアクセス】
那覇空港から車で約1時間30分
那覇市から車で約50分～1時間

本市は、沖縄本島中部の東海岸に位置し、県都・那覇市から約25㎞の距離にあります。金武湾と中城湾に面し、東南部に広がる勝連半島の北方海上および東方海上には、有人、無人の８つの島々があり、美しい風景と豊かな自然環境に恵まれています。

気候・自然

本市の気候は、亜熱帯海洋性気候で平均気温は23.0℃前後で、年間降水量は約2,041mmとなっています。市の中央には標高204メートルの石川岳があり、周囲にはイタジイを中心とする広葉樹林が広がっています。市の中央部には、本市と恩納村の境界を源流とする天願川が横切り、金武湾に注いでいます。天願川は昔から地域の人々の水源として、憩いの場として親しまれてきました。市の南部には勝連半島が太平洋に突き出すように延びており、平安座島につながる海中道路の周辺は遠浅の海が広がっており、干潮時には広大な干潟が現出します。

土地利用

本市の面積は、沖縄県内で6番目の市域を有し、市土面積に占める割合は、農用地と山林、原野などの自然的土地利用の合計が約33.5%、道路や宅地などの合計が32.8%、その他が33.7%（平成20年度うるま市国土利用計画より）となっています。また、市域には米軍専用施設・区域が７箇所あり、市土の利用、都市計画および地域振興を図る上で大きな懸案事項となっています。

人口

本市の人口は、2010（平成22）年の国勢調査によると、平成７年から平成12年にかけては4,764人の増加、平成12年から平成17年にかけては3,543人の増加、平成17年から平成22年にかけては3,444人の増加と、増加幅はやや小さくなっています。人口構成では、年少人口比率が徐々に減少している中で、老年人口比率（平成22年17.5%）は増加傾向にあり、全国平均（平成22年23.9%）よりは低いものの、沖縄県平均（平成22年17.2%）との比較ではわずかに高くなっています。また、世帯数は増加しているものの、一世帯あたりの人数は減少し、核家族化、単独世帯の増加など世帯の多様化が進行しています。

歴史

本市は、2005（平成17）年４月１日に旧具志川市、旧石川市、旧勝連町、旧与那城町の４市町が合併して誕生したまちです。市名の「うるま」は“サンゴの島”を意味する古い沖縄方言で、“うる”はサンゴ、“ま”は島の雅名です。

具志川市は、豊富な水資源と肥沃な土壌に恵まれ、かつてサトウキビの生産が沖縄一を誇っていました。太平洋戦争後は沖縄文教学校、沖縄外国語学校、農林学校などが創設され、文教のまちとして発展してきました。石川市は、戦前までは現在の沖縄市にあたる美里村に属していましたが、戦後、美里村から分離して石川市となりました。戦中戦後は難民収容所や琉球政府の前身である沖縄諮詢会や民政府が設置され、沖縄の政治・経済・教育文化の中心地として発展してきました。勝連町は、勝連城城主・阿麻和利の時代には、海外との活発な交易により大和の京や鎌倉にたとえられるほどの繁栄を築いていたと伝えられています。勝連城は2000（平成１２）年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一つとして世界遺産に登録されました。与那城町は、約6,000～7,000年前の藪地洞穴遺跡（藪地島）や約2,500年前とされる「シヌグ堂遺跡」（宮城島）などがある歴史の古いまちです。琉球王国の国王・尚寧王（しょうねいおう）の父親にあたる与那城王子尚懿（しょうい）の拝領地であったとも伝えられています。

隣接する４市町は歴史的なつながりが強く、地縁、血縁など住民同士の交流も古くから続いており、生活・経済・文化面において一体的な歩みを刻んでいます。

昔の勝連庁舎周辺と県道8号線

戦後直後の石川地区の様子

安慶名十字路方面に向かって

昔の与那城庁舎周辺・海中道路